

ドウルーズ＝ガタリにおける政治と国家
国家・戦争・資本主義

ギヨーム・シベルタン＝ブラン

上尾真道・堀千晶 訳

書肆心水

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

Guillaume SIBERTIN-BLANC
POLITIQUE ET ÉTAT CHEZ DELEUZE ET GUATTARI
Essai sur le matérialisme historico-machinique

©PRESSES UNIVERSITAIRES DE FRANCE, 2013

This book is published in Japan by arrangement with
PRESSES UNIVERSITAIRES DE FRANCE
through le Bureau des Copyrights Français, Tokyo.

目
次

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

導 入 11

第一部 原―暴力―国家という前提

第一章 史的唯物論と国家―形式の分裂分析 23

国家の起源におけるアポリア――不可能な発生と見つかからない始まり 26

〈原国家〉の自己前提運動――国家―形式のアンチノミー的歴史性 33

概念でも装置でもなく――起源的幻想にして〈理念〉の妄想であるような国家―形式 41

第二章 捕 獲――国家力能の本源の蓄積概念のために 48

国家的捕獲と社会諸形成体の分析――機械状―史的唯物論の根本諸概念 48

「国家なき社会」の問いへの回帰――先取り―戒いのけとストック形式 59

捕獲と主権性――暴力をめぐる国家的経済と国家的非経済 73

第二部 外―暴力―戦争機械仮説

第三章 遊牧論——戦争機械仮説へ向けて 89

遊牧とその「機械」——大地のノモスと国家の領土化 94

遊牧民的ノモス——反ヘーゲルのテーゼか、ネオ・シュミットの仮説か 105

機械化プロセスと空間的諸論理 124

第四章 定式と仮説——国家による領有と戦争力能の系譜学 135

クラウゼヴィッツ、あるいは〈定式〉——戦争の道具的理性の歴史と前提 137

〈仮説〉の体系的な叙述 145

現状と暴力の無制限化——〈定式〉の反転、あるいは〈仮説〉の転換 157

クラウゼヴィッツ、レーニン、シュミット、フーコー、ドゥルーズリガタリ
——対話形式のフィクション 175

第三部 内ー暴力——資本主義公理系

第五章 資本の公理系——諸国家と世界規模の蓄積 183

資本主義の無制限化——コード、脱コード化、公理系 184

世界資本主義による包摂——全世界的な包括と現代国家の類型学 198

資本主義諸国家の同形性と異質性——新自由主義による世界規模の攻勢 211

多形性、新帝国主義、国内の植民地化 218

第六章 マイノリティへの生成変化、革命的なものへの生成変化 227

マクロ政治学とミクロ政治学——マイノリティ戦略における分断 227

現代の資本主義公理系内でのマイノリティ化とプロレタリア化——社会・自由主義的な統治性 248

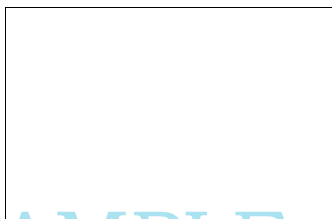
マイノリティの闘争における自律性と普遍性——同盟のブロックと革命的なものへの生成変化 261

結論 ミクロ政治は起こらなかった 277

注 291

訳者解説 339

SAMPLE
Shoshi-Shinshu.com



ドゥルーズ = ガタリにおける政治と国家
国家・戦争・資本主義



凡例

- ・書籍・雑誌・芸術作品などのタイトルは『』で示す。
- ・^–は「」で示す。
- ・イタリック体による強調は傍点で示す。
- ・（ ） は原文どおりに使用する。
- ・大文字で始まる語は ^– で示す。
- ・訳者による補足説明には「」を用いる。
- ・原語の併記が理解の助けとなると思われる場合、そのアルファベット綴りを、訳語の後の（ ） 内に示す。
- ・引用については、既訳を参照できるところは利用し、必要に応じて適宜、新たに訳出する。

導 入

ドゥルーズ・ガタリの政治思想はひどくないがしろにされている。ときにいわゆるミクロ政治的アプローチのために後回しにされている。ときに言及されたかと思えば、フーコー、ネグリ、ランシエールなど同時代の思想家のために頼まれてもいない思弁を補う役を担わされている。別のときには奇妙な外挿法ではぐらかされている。ドゥルーズの著作の形而上的、ノエシス的、存在論的言表に政治的含意が読み取られる一方で、近代政治思想の集中と分裂の中心をなす鍵^キシニフィアンについての二人の命題は、いっさい考慮に入れられないのだ。もちろん彼らに公正であろうとすれば、言説の取り締まりを訴えて、もろもろの言表を言説的国境へと追い払い、「形而上学」、「美学」、「政治」のおのおのの管轄へ帰そうとすることなどあつてはならない。彼らこそ、いつもそれらの輪郭を攪乱しようとしてきたのだから。ただし、言説を脱コード化したために、マクロ政治的な問題が、主体性のミクロ政治学、マルチチュードの終末論、分け前なき者たちの密漁といった名目のもと、奇跡の蒸発を遂げたかのごとく提起

すらされなくなるのであれば、やはりこの省略について考え直すべきであろう。

もっともあきらかなことは、この省略のせいで、ある圧倒的な事実が一切取り上げられずにいるということである。つまりドゥルーズ・ガタリの共著では、直接的に、明示的に、すなわちはっきり画定可能な一群のテキストのなかに特定できるような仕方では、現代政治思想の核心問題のいくつかの再検討作業が行われているのである。国家・形式、主権の問い、暴力と法の関係という問い、諸々の国民形成体の歴史的発展、またそれら組織体が人民・マイノリティ・自律・主権性といった諸概念のあいだに開いた再結合の歴史的発展、経済過程と社会権力・国家権力構造との関係、戦争の問い、地理経済学と政治学との込み入った関係など。明白な抹消の痕跡から見れば、ある面で問題なのは、フェリックス・ガタリの理論的、政治的、制度的な理路とそれがドゥルーズの仕事に与えた影響とが、哲学研究において執拗に抑圧されているという事態である。^①だがこの抑圧は、たんに学問領域の境界のせいで、大学業界でも他の分析分野でも著者二人の知名度のあいだに偏りがあるために生じているのではない。もっと根本的な次元で——少なくとも本書で特に二冊の『資本主義と分裂症』^②を読んでいくにあたってそうしたアプローチを取る——問題なのは、この抑圧は別の、やはりしつこい抑圧に裏打ちされている、ということである。すなわち、当時の政治的立場を理論と実践において定義しており、だからこそ概念的労働という種別的手段によりそこへ介入することが重要であった、問題系の領野の抑圧である。さて望むと望まざるとにかかわらず、ドゥルーズ・ガタリが政治思想の地平でぶつかり、様々に批判と発明を繰り返して再検討を試みた問題の大半は、いくつかの特定の言説形成体由来していた。その最たるものこそマルクス主義であり、その理論言語と政治文法が抵抗と解放のための闘争をいい表し、表象し、問題提起する仕方の中心だった。だがこれまでドゥルーズ・ガタリにおいて、また別の意味ではフーコーにお

いても、探されてきたのはマルクス主義のオルタナティブである。その追跡は、それなりに辛抱強く、一連の置換を通じて行われてきた。マルクスからニーチェへ。「ヘーゲル＝マルクス主義」の動的否定性から「差異の哲学」へ。他律と分割的同一性の弁証法から、主体性のミクロ政治へ。この操作は、一九六〇年代から一九七〇年代の転回以降に現れたもので、ときに著者たち自身も、著作の主題からいささかはみ出しつつ意思表示を行うとき、その有効性を認めている。一九八〇年から九〇年代の受容期になると、これが体系化されてしまうのだが、しかしそのときニーチェ＝マルクス、あるいは差異＝弁証法の二者択一は、教科書的な練習問題になってしまい、その理論＝政治的争点はいよいよ効力を失ってしまった。

むしろ最近イザベル・ガロが、この哲学的＝政治的シークエンスを扱った著作で提示した作業仮説を採用すべきだろう。⁽³⁾この著作は、ちょうど数年前から戦後フランス哲学に兆候的読解を施そうとして開始された試みを支持するものであった。すなわち、それら哲学を、一九六〇―七〇年代のイデオロギー＝政治的な脱構築・再構築という極めて問題提起的な領野に再登録しようとする試みである。そのとき中心にかかわるのが、(遠回しに仄めかされるような時にさえ、いや、おそらくそのような時こそ)諸々のマルクス主義との関係である。⁽⁴⁾これらの仕事は共通して、マルクス主義が当時さしかかっていた「危機」を考慮に入れている。ただし、そこでも踏まえられているとおり、この診断はしばしばマルクス主義それじたいの名ですでに述べられていた。また、その診断は、ある意味でマルクス主義の歴史と共存しており、マルクス主義が大衆の組織化や運動に領有されることで変形したり、動員される情況や闘争を受けて分割したりすることと不可分であった。本書に特にかかわる情況にかんしては、とりわけつぎの点を考慮すべきである。もし危機があったとすれば、それは、以下の三つがもつれ合う複雑な運動

第一部
原―暴力―
国家という前提

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

第一章 史的唯物論と国家―形式の分裂分析

ドゥルーズ・ガタリの共著には国家の問いが出没する。その姿は少なくとも謎めいたもので、また論証の枠組みも普通ではない。一九七二年、『アンチ・オイディプス』第三章にて道徳と資本主義の長大な系譜を追うさなか、不意に、「専制君主制」社会機械とそれに対応する国家の検証が始まる。「専制国家」、「アジア的国家」、「起源の国家」、「原国家」、「頭腦的理念性」。「あらゆる国家がそれであろうと願う欲望するもののモデル」⁽¹⁾としての客観的、理念的パラダイム。宣教師やレヴァントの旅人たち、ムガル帝国の客人たちの物語によって育まれた、古い「東洋学」の「イメジュリーを操りながら、これらの決まり文句はひとつの多義性を蘇らせている。それは『アンチ・オイディプス』にしばしば見出されるばかりではない。国家をめぐるドゥルーズ・ガタリ思想全般を横切っている。ちやうど言表行為のふたつの体制のあいだの不可識別闕のように。歴史の実証性の分析が問題なのか。それともエクリチュールやイメージに訴えながら、歴史が欲望される仕方、いや欲望的備給のもとで構成的に妄想される仕方をわれわれ

に垣間見せ、感じさせんとしているのだろうか——ただし「分裂分析」の原理的テーゼを追いかければ、欲望の備給は、社会的ないし構造的な実定性におとらず客観的規定にかかわるものだが。われわれが目下読んでいるのは、マルクスの『資本主義的生産に先行する諸形態』の延長なのか。あるいはフロイトの『人間モーゼと一神教』の変奏なのだろうか。エンゲルスの『家族、私有財産および国家の起源』の書き直しだろうか。それとも『トートেমとタブー』の新たな異本であろうか。パリンプセスト〔書かれて消して新たな字が上書きされた羊皮紙写本〕が重ねられ、一次資料と対話相手は倍増し、論証的スタイルと活写法とが互いに入れ子状に啞え込む。こうして上記の二択は結局、決定できなくなるのだが、それじたいがすでに、〈原国家〉仮説、および社会的諸形成体の歴史のなかでのその生成変化の分析の目標を示す指標である。歴史的客観性から、明白な「主観的」あるいは「心的」欲望の平面を分離することが拒否されるのだ。両項の相互的な外在性を前提とする内面化や投射の関係に代えて、社会的形成体と欲望的形成体とによる歴史的現実の共一構成、共一生産の関係が置かれるのである。こうして、この仮説は国家一形式の理論へと至る。この理論は、国家一形式の効果・効能の諸様式を、社会的生産と無意識的生産の双方において同時にあきらかにすることを目指すのだ。したがって、この形式は、権力装置と欲望の超個体的指定とを結合する。複雑な制度システムと集団的主体化のシステムとを結合するのである。

問題はこれらふたつの面の絡み合いを、国家を諸社会の物質的生成変化のうちで捉える人類学的・歴史のアプローチと、集団幻想としての〈原国家〉を扱う分裂分析のアプローチとが相互に干渉し合う点において理解することである。〈原国家〉、つまり「あらゆる国家がそれであろうと願う欲望するもののモデル」であるが、また国家の諸主体の欲望でもあり、「国家の欲望の欲望」^③の主体化でもある。まずは主権性の問いを再検討せねばならない。主権性についてドゥルーズ・ガタリが提示しているひとつの定

式は、社会・制度と無意識の双方が分かち難く結びついた次元で、主権権力の構成がいかなる型の服従をもたらすのか、考えることを可能にしている。彼らは、そうした権力表象を支える制度的・象徴的組織化をめぐる問いを、その権力審級が実行する要求・表象・情動の集合化形式の検証と結びつける。その点で彼らの国家現象の分析は、ライヒ流のフロイト＝マルクス主義や、『集団心理学と自我分析』のフロイトとの討論をその土台としているばかりか、さらにはスピノザの『神学政治論』へと連なっている。その極め付けの点が「起源的国家」の概念の構築である。「起源的国家」は、無意識の超個体的生産における権力奪取の操作子であり、諸々の集団的同一化の規制、また社会的諸個人の主体化様式の規制が行われる幻想シナリオを再組織する。それゆえ、この操作子もたらす事後性の効果、すなわち歴史を通じてその絶え間なき「回帰」が、つぎのことを理解可能にしてくれる。一体なにが、法学、政治学も、社会学、心理学のアプローチをも行き詰まらせる非合理性の岩盤をなしているかを。すなわち国家暴力が、国家の抑圧的権力の社会的・経済的・政治的機能性をあきらかに超出する時、また国家の係官や代表たちの主体的指向性をあきらかに超出する時、どんな激発的あるいは「超・制度的」形式がこの暴力を飾るのかを。この原・暴力をこそ、国家・形式に内在的なパラノイアというドゥルーズ＝ガタリのテーゼが説明することになるろう。

とはいえドゥルーズ＝ガタリは、国家現象を心理化しようとしているのではない。また、国家権力の変形体および国家装置を、社会関係と集団的闘争の弁証法のなかで史的かつ唯物論的に描く代わりに、政治現象の応用精神分析をやるうとしてゐるわけでもない。欲望の内在的概念に照らしていえば、国家が欲望の内的「コンプレクス」になる場合には、分裂分析の第一テーゼに従って、欲望そのものがひとつの生産となつてゐるはずなのだ。つまり経済的・政治的関係に内在的であり、さらにはその関係を支

訳者解説

本書は、Guillaume Siberin-Blanc, *Politique et État chez Deleuze et Guattari : Essai sur le matérialisme historico-machinique*, PUF, 2013 の全訳である。著者ギヨーム・シベルタン＝ブランは、一九七七年生まれのフランスの政治哲学者であり、とりわけドゥルーズ＝ガタリの政治哲学の専門家として国際的にもその名を知られ、本書もすでに英訳が出版されている (*State and Politics: Deleuze and Guattari on Marx*, Translated by Ames Hodges, Senioext (c), 2016)。また現在、『アクチュエル・マルクス』誌の編集に名を連ねており、本書は同誌のシリーズの一環として刊行されたものである。

著者の経歴を簡単に振り返っておくことにしよう。二〇〇六年に、ピエール・マシユレの指導のもと、およそ千頁にわたる浩瀚な博士論文「政治と臨床——ジル・ドゥルーズの実践哲学に関する研究」(*Politique et clinique : Recherche sur la philosophie pratique de Gilles Deleuze*)を提出し、以降現在まで、精力的にドゥルーズ＝ガタリの政治哲学をめぐる論文を多数執筆している。また二〇一〇年には、本書の原国家論や資本主義論とも関係の深い『ドゥルーズと「アンチ・オイディプス」——欲望の生産』(*Deleuze et l'Anti-Œdipe. La production du désir*, PUF, 2010)を刊行しているのに加え、それに先立って、二〇〇八年には、『政治哲学(一九—二〇世紀)』(*Philosophie politique (XIX^e-XX^e siècles)*, PUF, 2008)を出版している。『政治哲学』は、近代国家の系譜学であり、ルソーの契約論とバークの保守主義にはじまり、レーニンの革命政党論とフーコーの権力論で締めくくられる大学生向けの優れた国家論の入門書である。様々な思想家の手際よく的確な紹介と並行しながら、フランス革命以降の

ネーション

人民、主権、法、領土、国民といった国家論の基礎概念を提示し、歴史学、経済学、社会学が近代国家において果たす役割を示し、自由主義国家、社会国家、官僚制国家という三つの国家類型を示し、最後に国家概念の極限としての自殺的な全体国家と、革命下の国家を概観するという構成をとる。本書とも交叉する主題や思想家たちにもたびたび言及しながら、国家論の視座から、ドゥルーズ・ガタリの戦争論にも一節が割かれている（第三部、第一章、第一節）。

ところで、ドゥルーズはかつてあるインタビューで、「フェリックス・ガタリと私は、それぞれ流儀が違わだろうとはいえ、ふたりともマルクス主義者であり続けていると思います。私たちには、資本主義とその発展の分析に焦点をしなければならないような政治哲学が信じられないのです」と述べていた。（『管理と生成変化』、『記号と事件』所収）。とはいえ、ドゥルーズ・ガタリは、むしろ資本主義のみを論じていたわけではなく、本書において著者は、ドゥルーズ・ガタリの政治哲学の核心を、「国家」、「戦争」、「資本主義」をめぐる唯物論的分析に見出している。これらはあとで見えるように、それぞれ独立した「力能」でありながら、しかし同時に、深く互いに絡まりあっており、歴史的プロセスのなかで、互いを変質させてゆくというのである。先述の『政治哲学』における簡潔な言葉を見てもよくことにするなら、「戦争の諸形態の進化は、資本主義の進化と切り離せない。だが資本主義じたいの進化は、国家の近代史と緊密に結びついている。そして国家はといえば、軍事能力の組織化、その政治的行政、その利用のうちに、おのれの政治的かつ市民的な機能を進化させる強力な要因を見出す」（p.211）。三対のあいだの循環関係を見定めるこうした立場によるなら、現代の資本主義分析は、必然的に、国家論と戦争論を含まねばならず、また、現代の国家論は戦争論と資本主義論を、現代の戦争論は国家論と資本主義論を含まねばならないということになるだろう。「政治哲学」は、それらが絡み合う複合的な状況下における「暴力」の変質や強化をつぶさにあきらかにし、その大局的な史的構造を視座に収めることを焦眉の課題のひとつとするのであり、まさしくそれこそ著者が目指すところでもある。ドゥルーズ・ガタリ

の思想におけるマクロ政治学の可能性に焦点を当てたものなのである。

さて、このような試みがなされる背景として、ドゥルーズ・ガタリの仕事がしばしば位置付けられる時代的文脈、すなわち七〇年代以降の、いわば脱政治的な政治哲学とでもいうべき逆説的文脈を指摘できるだろう。それは一般に主体性のミクロ政治学への傾向と呼びうるものである。この時代、一方で六八年学生叛乱の終息に伴う革命的政治の意気消沈を背負いつつ、他方では新自由主義的資本主義の新たな台頭を展望しながら、政治の場面は、個人へ、局所的集団へ、あるいは来たるべき共同体へと囲い込まれていくことになる。「個人的なことは政治的である」とは、六〇年代の第二波フェミニズムが主張した有名なスローガンであったが、じつさいそのようにして、かつて労働者と資本の間、あるいは植民地と帝国主義国家の間に大きく引かれていた単一的戦線は、近代的市民社会の空間のなかで複数化し拡大していくこととなった。政治をめぐる哲学も概ねこれに答えるように振舞ってきたように見える。知られるとおり、ドゥルーズ・ガタリ自身もまた、『千のプラトール』で、このミクロ政治の哲学的言説領域を開くことに貢献している（ただし彼らにとってミクロとマクロの不可分性こそ政治を論ずることの賭け金そのものであった。本書第六章も参照のこと）。あるいは後期フーコーの権力論や主体論が与えた影響を考えてもよい。だが、こうした流れに即して登場し始める政治哲学の試みにおいては、しばしば、惑星規模で確立し始めた国民国家秩序の内部の民主主義的共同体こそが、不可触の政治的地平としてあらかじめ設定されることとなった。そしてそのとき哲学は、こうした共同体の包摂と排除の操作に追加される倫理学を提供する役にとどまりかねなかった。

おそらくその背後で問題にすべきことのひとつこそは、著者も指摘するとおり、マルクス主義からの哲学の撤退であつたろう。構造主義／ポスト構造主義の思想が、アルチュセールはもとより、レヴィ・ストロースからラカン、フーコー、ドゥルーズ、ガタリと、深くマルクス主義の磁場の中で思考を触発されてきたことは、今日では忘れられがちである。特に一九八〇年代以降には、労働と資本の妥協からなるポスト階級社会の成立という現状認識の中で、マルクス主義的議論はすでに時代遅れになってしまったとの主張が現れはじめた。九

○年代にはソ連・東欧社会主義諸国の崩壊が、この主張をいよいよ裏付けたと考えられた。そうしたなか、フランス現代思想もまた、マルクスの影を厄介払いされながら、現代的で芸術家然とした主体性の称揚者たちとして迎えられ、むしろかえって新たな資本主義を準備したとして非難の対象にさえなるしまつである（例えばボルタンスキー＆シャペロ『資本主義の新たな精神』を参照）。

こうしたなか、近年のフランス政治思想のひとつの流れとして、六八年五月を中心に、かつての政治運動と思想のつながりを、歴史的にいつそう明確化しようとする試みが生まれている（例えば著者も序文で紹介しているイザベル・ガロの著作。I. Garo, *Foucault, Deleuze, Althusser & Marx — La politique dans la philosophie, Démopolis, 2011*）。そこでは半世紀前のマルクス主義や社会運動の曲折を捉え直しながら、現在の政治哲学のうちに、もう一度、批判の足場を形成することが試みられている。「構造主義」、「ポスト構造主義」が知的な商品フェティッシュとなった現状から、あえてする反時代的な読解の試みを通じて、批判的思想を解放しようとする作業が始まっているのだ。本書の貢献の一つもその点にあるだろう。ドゥルーズ・ガタリのマクロ政治を取り上げることは、いわば民主主義の政治哲学のうちで不問にされている基盤そのものを揺るがす点を探ることである。

ひるがえってこの貢献は、現代のアクチュアルな政治課題の分析へと乗り出すための手がかりを提供してくれるだろう。二〇世紀のあいだ近代の拡張として捉えられてきたグローバル化は、二一世紀にひとつの閾を超えて、新たな政治的景色を生み出したと見える。そのゆゆしき兆候は、国家と資本の結びつきの強化、あるいは、国家形式が世界規模の資本主義の中で果たす従属的役割、また戦争と世界経済の接続、移民・難民として流動化する人口と新たなナショナリズムの勃興、領域内植民地と戦争機械の暴力的呼応といった諸々の問いとして、地上のいたるところに噴出しているところである。こうした中、ドゥルーズ・ガタリの哲学に依拠することは、スケールの大きな分析を可能にするであろう。本書はそうした試みへの最良の導入である。

それでは以下、各章の内容を概観してゆくことにしよう。